



月刊 第 593 号

惜別と出発の

除夜の鐘

早々と本格的な寒波の襲来、それこそ所謂雪国と言われる地方だけでなく全国的な形で、こんな冬も珍らしいもので、いつもなら雪マークの並ぶ日常の中から関東地方のお日様マークを羨

しく眺めているのに。今年には秋以来特に荒模様の天候で漁師には泣かされる天候だったとか。新潟気象台の発表では十一月は晴天が二日しかなかったとのこと。それでも思わぬ



12月17日閉町式の式辞をのべる高橋町長(左)と、町の将来を引き受ける佃長岡森市長(右)。写真の大きさは構図の都合上です。



コールエコーはまなすの合唱「ふるさと」と共に昭和32年大河津村との合併と同時に制定された町旗が降納、48年間の役目を終り歴史の中で安息の日を迎える。



恒例の白山姫神社鳥居ノ縄の奉納。新雪の中で厄年に当る昭和40年生(巳年)の有志による作業風景。

お天気に恵まれる日もあつて、そんな時の印象が強力なせいかな冬の天候以上に思わしい事件つづきでそちらに気をとりながら天候のことまで気が廻らなかつたせいであつたと言ふ間に師走を迎えここ一週間ばかりの冷え込みで慌てふためいている次第。

今日は閉町式と言うことで私も町の保護司を代表して参加。愈々寺泊町とのお別れを実感。思えば紆余曲折を経ての長岡市への合併である。構造改革と言う大きなうねりの中で全国的な規模での動きのように見えながらそれぞれの地方が築き上げて来た伝統と文化、地域の状況が微妙に絡み合つて、事は仕掛けられた政府の意思通りには運ばず、

わが町もその例にもれず苦渋の選択、決定を迫られることとなつた。最もスムーズに合併が可能と目されていた西蒲南部との連携が弥彦村の離脱で崩れて以来の迷走は今更乍ら振り返れば胸の痛む思いである。それにしても十数年前の地域作りへの一億円の大盤振舞いが数年間つづいて以来の今日への移行は誰が想像し得たであろうか。それが活かしての村づくり町づくりに奔走したあの時代はまさに一夜の夢の如しである。閉町式の冒頭中学生の代表によつて読み上げられた「寺泊町民憲章」はその夢の時代へ向つての雄叫びであつたとも思われるのだが、こ

れからの新しい出発へ向つての確認と若い力への期待として聴き取つて欲しい願いがこめられているのだと感じられた。

寺泊町民憲章
(昭和六十二年七月五日制定)
わたくしたち寺泊町民は、恵まれた自然と歴史の町に生きていくことを喜び、かぎりない躍進を願つて、この町民憲章を定めます。

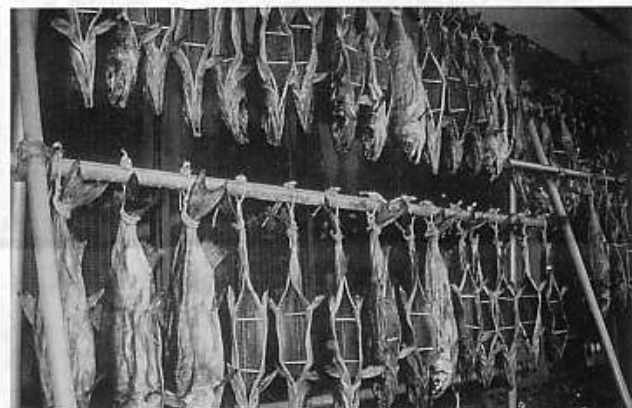
- 「広い海、大河と緑を大切に美しい町をつくりましょう。
- 「豊かな心とたくましい体をきたえ生き生きとした町をつくりましょう。
- 「助けあいと親切の心をもち、あたたかい町をつくりましょう。



荒涼たる冬の寺泊海岸から早々に雪化粧の弥彦山。
松林は冬の寒風と飛砂から町を守ってくれる。
平和の像も寒さにお手あげとも見える。



冬の怒涛を何とかカメラにおさめたいと、写真担当の松田さんは寒さの中海岸を駆け廻って下さった。
その中からこの一枚を選んだ。



今年のように寒波強風の冬は、鮭の寒干しには絶好である。
暖冬だと蠅にやられて台無しになる。
熱燗の肴に一匹いかがですか。

「働くことを喜び、創意をこらし希望に満ちた町をつくりましょう。」
「歴史と伝統に学び、文化の香り高い町をつくりましょう。」
行政の仕組みは変わってもそこに生きる人達がその地域を育て守ってゆくのでありましょう。
その土台となるのがこの町民憲章にうたわれている心であり願いであります。
今年の除夜の鐘は特別の意味をもつこととなります。除夜の鐘と共に寺泊町との措別があり、新長岡市への出発となります。
外は寒と風です。やがて雪へと変り相当な積雪が予報されています。雪下ろしと呼ばれる雷がドロドロと響いています。

寺泊は冬が一番

さとうのぶひと

テレビはN響とアシケケナーの指揮によるベートーベン「第九」の演奏クライマックスです。
「農作物」と書いて「のうさくぶつ」と読む。「作物」だけなら「さくもつ」と読むのに「農」がついて「のうさくぶつ」が一般的になっていきます。「競売」と書いて「けいばい」と読む。「きょうばい」で読み慣れてしまっていると「けいばい」には抵抗があります。「競走」を「けいそう」と読んでしまいそうです。「頭蓋骨」を「とうがいこつ」と読んでいるのにはびっくりし

ました。「ずがいこつ」と読んできた頭にはひどく違和感があつて。ところが「ずがいこつ」は慣用で、どうやら「とうがいこつ」の方が正しいらしいのです。
本誌先月号で中村編集人が、豆腐の「おから」を「きらず」と言ってきたの知らない世代についてふれていました。それを読んで、子供のころ身近だった言葉で、今はほとんど使われなくなつたいくつかに思い至りました。

たとえば洋服の「ポケット」のことを「かくし」と呼んでいました。お正月、神棚にお供える鏡餅の小さなものは「おけそく」。「かくし」はまだ「広辞苑」に載っていますが「おけそく」はありません。さる人から聞いた話では「おけそく」は「お華束」と書くのだそうです。なるほどと思いました。
「かくし」が「ポケット」に替つていく過程は目に見えるようです。わたしの子供のころには洋服が普通になっていましたが、着物世代のお年寄りがまだたくさん残っていました。親が子供だった時代の数少ない写真を見ると、みんな着物姿です。着物にポケットがなかったせいか、親達は「ポケット」などというしゃれた言葉をあまり使いませんでした。着る物にポケットを付けるのは邪道、つまり「物隠し」ではないかという反洋服意識

識も読み取れます。
どこの家にも貼る板の一枚や二枚はあり、天気の良い日など、糊で洗い貼りした着物の布が干してありました。「貼り板」や「洗い貼り」もすでに死語ですが、なつかしい風景のひとつです。圧倒的多数が洋服を着るようになり、着物姿もお年寄りが見えなくなると同時に、「かくし」という言葉も次第に消えていきました。今では、普段着に着物を着ているのは、お寺のお坊さんくらいではないでしょうか。いずれにしても少数派と多数派の、言葉の上での鮮やかなせめぎあいがありました。
冬になると手が冷えるものから、手袋を持たない子供は



前号紹介のサークル「演劇に寄り道するかい？」の「越の白波～初君物語」の一場面。
長岡リリックホールが会場で已に合併の交流開始とも。



町立の小中学校三校の校庭に「社明運動」のモニュメントが建てられた。「自分を大切に、ひとにやさしく」今一番に求められているテーマかも。



吉地内の通学バイパスに冬桜の並木がある。
今は雪の舞う中で凍々しく咲いている。
咲くも雪の中、散るも雪の中。

ズボンのポケットに両手を突っ込んで歩いてみたものでした。しかし小学校ではこれが不作法とみなされ、先生に見つかると「こらっ」「かくし」から手を出せ」と注意を受けました。「かくし」という荒削りな言葉にまつわる思い出は尽きません。
言葉は文化の根幹にあり、もともと保守的なものです。もし言葉がくるくる変わるものであったら、文化の受け渡しができません。読み方のばらつき、消える言葉、新しい言葉—民衆の造語能力が活発な時代は、社会変動もめまぐるしいと言われます。新造語が少なければ停滞の時代の証しです。
先日、ITの技術者でネット

・ビジネスも手がける人物と話ををする機会がありました。蝶のように舞う言葉のたわむれや、マシンガンのごとく飛び出す専門用語にはとてもついていけませんでしたが。一瞬、知らない外国語を話す人物と錯覚したほどです。言葉の断絶とはこういうことを言うのだな、と実感いたしました。
言葉の断絶は世代の断絶でもあります。「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である」とE・H・カーが半世紀も前に言っていたことを、改めて噛みしめました。
さて、一年のうち寺泊にとってもっとも過酷な季節が、足早にやってきました。連日連夜、

粉雪まじりの強い北風と荒れた海。家々はじつと耐えるようにうずくまっています。まさに冬の寺泊は、作家水上勉の見たとおりの世界が展開しています。ところが、みんな嫌がるこの季節に、「寺泊は冬が一番いい」と言った人物がいました。寺泊中学校に入学した年の担任で、われわれ団塊世代の生徒の間で「親分」とあだ名された名物教師、泣く子も黙るR・E先生です。よそから赴任してきた先生でしたが、この寺泊を深く愛され、しょっちゅう寺泊に泊っておられたようでした。
真冬の授業中のことでした。吹雪が教室の窓ガラスを打ちつける暗くて寒い日でした。授業

を途中で中断しストーブに石炭をくべた先生は、話を横道に逸らせ、「寺泊は冬が一番いいな。それも、海が鳴って、雨戸が鳴って、電線がうなる大荒れの夜が」と独り言のように言いました。「そういう夜にやる熱燗の一杯は、こたえられんからなあ」と付け加えて生徒に向き直り、にたりと笑ったものでした。

誌代御後援(敬称略 順不同)			
高槻市	本田 ヨネ	金三千元	
長岡市	友厚	金三千元	
新潟市	小藤 友厚	金三千元	
	佐藤 厚	金三千元	
	梅下 厚	金三千元	
	柳下 厚	金三千元	
燕市	梅子	金五千元	
	八木 芳夫	金五千元	
	高橋 芳夫	金五千元	
	高橋 サダ	金三千元	
三条市	巨野 ミヨシ	金三千元	
	田辺 忠吉	金三千元	
	石川真紀子	金三千元	
	梅沢酒田	金三千元	
	大越 晴夫	金三千元	
	笠原 昭二	金三千元	
	伊勢塚利久	金五千元	
東京都	健一	金三千元	
	引田 ミイ	金三千元	
	廣川 修二	金三千元	
	五十嵐重尾	金三千元	
	近藤しげる	金三千元	
	山田 幸彦	金三千元	
立川市	昌子	金三千元	
	直井 昌子	金三千元	
富山市	吉雄	金五千元	

高槻市 本田 ヨネ 金三千元
長岡市 友厚 金三千元
新潟市 小藤 友厚 金三千元
佐藤 厚 金三千元
梅下 厚 金三千元
柳下 厚 金三千元
燕市 梅子 金五千元
八木 芳夫 金五千元
高橋 芳夫 金五千元
高橋 サダ 金三千元
三条市 巨野 ミヨシ 金三千元
田辺 忠吉 金三千元
石川真紀子 金三千元
梅沢酒田 金三千元
大越 晴夫 金三千元
笠原 昭二 金三千元
伊勢塚利久 金五千元
東京都 健一 金三千元
引田 ミイ 金三千元
廣川 修二 金三千元
五十嵐重尾 金三千元
近藤しげる 金三千元
山田 幸彦 金三千元
立川市 昌子 金三千元
直井 昌子 金三千元
富山市 吉雄 金五千元

小波会師走句会詠草

兼題 初時雨・大根引く他当季

初時雨

静かにねむる獅子ヶ鼻
能登 頑牛

竹の葉の

音が雫に初時雨
竹内 霍山

法要の

客を迎かへば初時雨
水沢 蕉子

初時雨

連絡船の入るころ
内藤 蓮子

引く船も

引かるる船も初時雨
中村 流瓢



先号掲載の北の入口野積の岬温泉。
こちらは南の入口深層海洋水浴場の増築工事。
今年4月開場で已に増築と言う盛況振り。

大根引く

土の温もり踏みしめて
小形 美代

夫の抜き

妻の並べある大根引
外山きよし

降らぬ間を

走りばしりの大根とり
小島 冬扇

虫喰いの

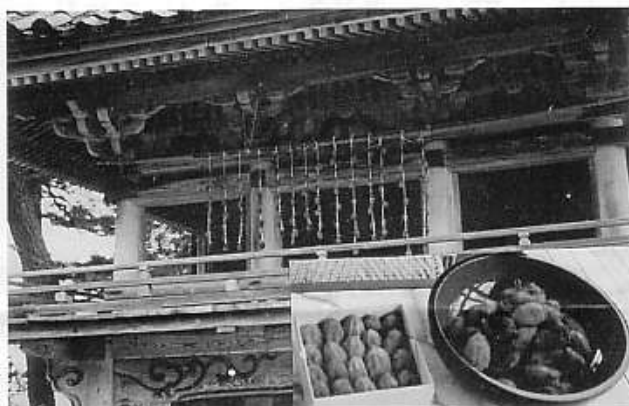
無農薬なる大根引
外山 海子

飾起こし

木蔭に眠る鯨塚
大越碧水子

役割を

決めてはじまる煤払い
加勢 白汀



今年は干柿の写真がないねとひやかされた。ではと早速の登場である。製造中と右下完成品。寒風の中朝晩鐘の音を聴き乍ら1ヶ月。

狭庭辺に

零れたばしる玉霰
小島 温石

山茶花の

咲きて明るし今朝の庭
広瀬 洋子

山茶花の

散り敷く庭を陽の動く
江原 汀子

あとがき

いよいよ今年最後のあとがきを書いております。長岡市への合併が目前で役場庁舎には遅くまで灯りがともり最終の事務処理の追い込みで大変な様子が雪の舞う外まで熱く伝わってくるようです。閉町式ではコールエコーはま

なすの「ふるさと」の合唱の中

で中学生の手で町旗が降納、高橋町長に手渡された時はジーンとした思いが会場に溢れるのを感じました。今年には観光面で新しい躍進の年でした。高速艇の両泊間就航で一万人以上が佐渡を訪れ(寺泊では佐渡へ初めて行ったと言う人が意外に大勢おられた)已に全島一市となった佐渡と新長岡市の一員となる寺泊観光協会がリーダーシップをとり佐渡からの観光客を呼び込もうと言う観光戦略が進行中と聞く。野積の岬温泉、水族館脇の海洋深層水の浴場施設共に新築増設工事が来春のオープンへ向って急ピッチで工事が進められている。



年末年始酒はつきもの贈り物。
酒、たばこは売り方も仲々気づかいの必要な時代。
楽しく健康的に飲みましょう。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興樹

発行人 新潟県寺泊町
ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五

振替番号 〇〇六二二〇二九番
電話 二二二五七四五

印刷所 吉野印刷株式会社